

勤務医部会だより

上矢作病院40周年に思う



幹事 田中 宏紀

上矢作病院と言ってもご存じの方は、あまりおられないと思います。この病院は、現在は岐阜県恵那市立となっており、岐阜県の南東端に位置し、長野県、愛知県と接する矢作川の上流の上矢作町にあります。上矢作町は、山の中の町で、当時無医村であったところへ、この町の出身の大島紀久夫先生を佐久総合病院より招聘し、診療所を建てたのが40年前です。先日その設立40周年記念の催しが開かれ旧交を温めてまいりました。診療所はその後60床の病院となりましたが、30年前に外科医がいなくなることで、以前の名市大第二外科（当時正岡昭教授）に依頼があり、私が最初に赴任することとなったことがこの病院とののかかわりの始まりです。当時私は32歳で、正直、気は進まなかったものの医局命令では逆らえず、赴任いたしました。道路事情は悪く、色々な店も少なく2年目の研修医と二人で休日の食事にも困りましたが、周りの人々の助けで、すぐに環境に慣れました。この上矢作の生活は、名古屋での暮らししか知らない私にとっては、公私にわたって大変貴重な経験でありました。

まず、私生活については、名古屋にいたころの私にとって、季節感ときたら寒い暑い程度しか感じていませんでしたが、この土地では、冬は極端に寒く、3月になれば川でアマゴが採れ、4月には桜が咲き花見をし、山菜が採れ、梅雨入り頃にアユの解禁があって皆アユ釣りに夢中になりました。そして夏には盆踊り、秋には、茸、山芋が採れ、まつりや運動会を楽しみました。すべてが自然と住民と密着した生活でした。

医療に関しては、大島院長が農村医療で有名な佐久総合病院の出身であることもあり、大変住民の健康教育に熱心で、健康祭りと呼び、手作りのパネルを何枚も作って休日に学校の体育館で行事を行い、後日そのパネルを持って平日の夜に各部落の公民館で健康教育をしました。また、職員間の仲も良く、

誰かが結婚するとなると、皆で何日も演奏の練習をし、貸会場などはありませんので、会場を手作りして祝っておりました。

また、外科医としても週に2回ほどの手術があり、全身麻酔を要する定期手術には、大学や関連病院の先輩をお願いして、指導をあおぎました。遠い田舎まで来ていただいた恩はいまだにありがたく思っております。

私は結局2年半この病院に勤めましたが、30年近くたった今でも第2の故郷のように思い、友人との交流もあります。また、若い時期にこの病院での医療、この町での生活を経験できたことが大きな財産となっております。

しかし、現在の臨床研修医制度が始まり、このような田舎の過疎の町の病院では、研修医が集まらず、当然医局から医師が派遣されることもなくなっております。さらに今後各科の専門医制度が始まりますが、大病院に若い医者が集まる傾向がさらに加速するでしょう。しかし、若い医師の育成は、本当に高度な専門医を育てる教育だけでよいのか、医療は大病院中心に高度医療のみに向かえばよいのか、はなはだ疑問であり、現在の制度はそこに誘導されているとしか思われぬように思います。上矢作病院は今では医師が3人となっておりますが、研修医の地域医療研修を受け入れてくれており、当院からの若い医師も1か月のこの病院の研修を非常に喜んでおります。今後、この病院の運営は非常に厳しいと思われませんが、50周年をなんとか無事迎えらるるよう祈るばかりです。

(名古屋市立東部医療センター)